



# 東京学芸大学リポジトリ

Tokyo Gakugei University Repository

院51期修士論文・修士副論文要旨：  
2019年3月修了（学会記事）

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2020-06-26 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2309/159239">http://hdl.handle.net/2309/159239</a>

## 院 51 期 修士論文要旨

2019年3月 修了

### 初等から中等教育段階における降水量分布情報の読図初見時の特性—段彩図および等値線図の差異—

大津 拓也

目的: 降水認識に関しては、これまで降水量に関する調査が主体で、防災上重要な降水量の空間的広がりに対する理解程度は明らかにされていない。降水量の空間的理解の深化には、降水量分布情報の活用が有効であり(島貫 1997)、本研究では初等～中等教育段階における降水量分布情報の読図特性を明らかにする。

方法: 2017年6～7月に東京都内の小学校第5学年(97名)、中学校第2学年(155名)、高等学校第2学年(322名)を対象にアンケート調査を実施した。内容は、日本全国の降水量分布(8月)情報(段彩図および等値線図)について読図初見時に最初に着目した領域(着目域)と着目理由、さらに降水や気候に関する認識(天気に対する関心(5段階評価)、最も印象に残っている雨に関する事柄(自由記述)などである。降水量分布情報の着目域は全400格子の着目域成分(有(1)無(0))に分け、それらに対してクラスタ分析(Ward法)を施した。

結果: 着目理由の特徴は形式的なものと内容的なものに大きく分類できた。すなわち、形式-位置として居住地であること、図の中心であることや、形式-色として図内の着色が青(多い)/黄(少ない)であることなどがあげられた。また、内容-多寡として降水量の多さ/少なさ、内容-数値として降水量の値なども示された。着目域は8つ

に類型化され、関東狭域(I)、関東(II)、九州(III)、四国(IV)、中部(V)、東日本、紀伊半島(VI)、瀬戸内・関東(VII)、瀬戸内(VIII)である。関東(II)は着目理由が形式-位置(居住地)の割合が大きく(73.0%)、天気に対する関心の上位得点(5.4点)割合が小さい(30.2%)。一方、関東狭域(I)の着目理由は内容-多寡(少なさ)の割合が大きく(55.6%)、関心の上位得点割合も大きい(46.7%)。また、四国(IV)は着目理由が内容-多寡(多さ)の割合が大きく(44.4%)、関心の上位得点割合は小さい(25.9%)。九州(III)や中部(V)は、着目理由が内容-数値の割合で大きく(15.6%や11.9%)、関心の上位得点割合も大きい(40.3%や38.8%)。瀬戸内・関東(VII)や瀬戸内(VIII)は、着目理由が形式-色(少なさ)で上位得点割合が大きく(62.7%や51.5%)、関心の上位得点割合も大きい(39.0%や39.5%)。このように着目理由が形式-色および内容-多寡で割合が大きい場合、少なさに着目するタイプで関心の上位得点割合が大きい。また、内容-数値を理由とした割合が大きい九州(III)、中部(V)、瀬戸内・関東(VII)は自由記述において降水現象の仕組みに関する記述割合が大きく(10%以上)、関心の上位得点割合も比較的大きい。なお、東日本、紀伊半島(VI)の下位クラスターで着目域が北海道の場合(12名)、小学生の割合(58.3%)や形式的理由の割合(83.3%)が大きく、系列位置効果の関与が示唆される。一方、紀伊半島の場合(13名)、着目理由は内容-数値の割合が大きく

(23.1%)、関心の上位得点割合も大きい(46.2%)。さらに、着目域の分布箇所が重複しているⅠ・ⅡおよびⅦ・Ⅷの着目域の面積(S)は関東挟域(Ⅰ)、瀬戸内・関東(Ⅶ)で小さい。この場合、内容-多寡(少なさ)の割合が大きいタイプⅠ、Ⅶで、着目域が限定的であった。等値線図では、中部(形式-位置)および四国(等値線の過密域:形式-線密度)に着目した頻度が高く、形式的理由が増大する。しかし、着目理由が内容-多寡(Ⅰ)や内容-数値(ⅢやⅤ)で割合が大きいタイプでは、等値線図においても内容的理由を記述した割合が大きい。すなわち、形式的・内容的な読図特性は図表現が異なっても維持される。対象者の読み取り方やその段階、属性に適應させた分布図情報や説明といった提供が極めて重要である。

## 軽井沢におけるキリスト教会の観光資源化とその地域的特徴

### 野口 恵里

本研究では、長野県軽井沢町に立地するキリスト教会を対象に、キリスト教会が観光資源としてどのように捉えられてきたのかを明らかにし、軽井沢におけるキリスト教会の観光資源化の変遷とその地域的特徴を考察した。

軽井沢のガイドブックにおける記述内容の分析により、メディアが付与する軽井沢のキリスト教会の主な観光イメージは「国際避暑地としての歴史性」「文化人との関わり」「建築物としての特色」「結婚式、リゾートウェディング」の4つに大別されることが明らかとなった。キリスト教会

の観光イメージの変化は、1970年代から2000年代前半までのカップルの憧れとして結婚式が注目された時期、2000年代にキリスト教会の見学や礼拝への参加が注目された時期、2010年代以降現在に至る、避暑地としての歴史と高原別荘地としての景観が注目された時期、の三つの段階として捉えることができる。近年、軽井沢地域の世俗化が進む中においても、キリスト教会は国際避暑地という第二次世界大戦以前から定着している軽井沢のイメージを象徴するものとしてガイドブックに取り上げられていると考えられる。

キリスト教会の観光イメージとして「結婚式」や「リゾートウェディング」が取り上げられることは他地域にはみられない独自の特徴である。リゾートウェディングの原点である軽井沢で行う、歴史あるキリスト教会での挙式は「本物の雰囲気」「上質」と捉えられ、他地域にはない魅力として多くのカップルに現在でも選択されている。

軽井沢におけるキリスト教会は、軽井沢の避暑地としての歴史を象徴する文化財としての価値や、教会結婚式およびリゾートウェディングの原点であり「本物」の教会式を挙げることができる独自性が評価され、観光資源化されている。そしてキリスト教会の歴史的・文化的価値は、軽井沢の国際避暑地、高級別荘地としてのイメージを現在にも存続させる機能を果たしている。軽井沢の観光地としての持続性を考える上では、キリスト教会が持つ観光資源としての価値を考慮することが求められる。

## 院 51 期 修士副論文要旨

2019年3月 修了

### 時間スケール別の降水量認識と情報獲得—教職課程の大学生を対象として—

大津 拓也

目的: 従来, 気候要素の物理量認識に関して, 気温については一定時点や期間平均における暑さ・寒さについて, 降水量については期間内の多寡の認識が時間スケール別に調査されてきた. 降水量は, 時間・日・月と異なる時間スケールにおける降水の有無や個々の現象による積算量で, 日変化や年変化の規則性が明確な気温に比べて変動が大きい. 防災において積算降水量は重要な物理量であるが, 時間スケールの異なる降水量認識についてはこれまで議論されてこなかった. 短時間降水量は日常生活において密接な物理量であり, 日~月等の長期間の積算降水量は防災の観点からも議論すべき認識内容である. また, 気候認識には経験的, 地誌的理解および系統的理解が関わることや, 情報獲得手段の差異も指摘されている. 気候認識は, 幼少期から連続的に獲得される情報の総体であることが想定されるが, 長期的な情報獲得の気候認識への関わりは明確になっていない. 本研究では, 将来的に防災教育に携わる可能性が高い教員養成大学在大学生を対象として, 時間スケール別の降水量認識とそれに関わる長期の情報獲得を明らかにする.

調査: 2017年6~7月に教員養成大学(東京学芸大学)において地理, 自然環境, 環境教育に関連する講義の受講者を対象にアンケート調査を実施した(223名). 質問内容は, 天気への興

味関心(5段階評価), 多いと思う降水量(時間・日・月)に関して, および最も印象に残っている雨に関する経験や出来事(自由記述)などについてである.

結果: 多いと思う降水量は, 時間(日)降水量では10~20(100~200)mmで回答者数が最大を示す. 一方, 月降水量では1000~5000mmにおいて回答者数が最大(30%)を示し, 時間スケールの拡大に伴って強雨研究の豪雨の定義や気象警報の基準値からのずれが大きくなる. さらに, 多いと思う降水量を時間スケールごとに四分位を境界とし, 降水量認識の階級を小~大の4階級(I~IV)に区分した. そして, 最も印象に残っている雨に関する情報を階級ごとに整理した. 被災経験などの強い経験は, 時間降水量では階級IVで回答割合が高く, 日・月降水量では階級Iで割合が高い. すなわち, 多い降水量の認識が極端な階級である場合, 強い経験を伴うことが多い. 仕組み(現象の原理等)は, いずれの時間スケールにおいても小さい階級IやIIで割合が高い. 報道(災害報道等)は, 中程度の階級IIやIIIで割合が高い. 以上のことから, 降水量の大小の認識は, 主要な情報獲得が報道の場合中程度の階級に近いが, 時間降水量においては経験(仕組み)によって大きく(小さく)認識される傾向がある. また, 階級による情報種別割合の最大最小の差は, 時間スケールが大きくなるほど小さくなり, 長期間の降水量の認識には階級による情報種の差異は不明瞭となる. 興味関心は, 時間スケールが大きいほど中程度の

階級で得点が高く、長期間で具体的理解が難しい積算降水量の認識には、興味関心や知識理解程度の高さが関わる可能性が考えられる(表1)。さらに、すべての時間スケールにおいて階級ⅠまたはⅣの場合、雨に関する語句の種類が少なく、雨・大雨を多く記述している。すべて階級ⅡやⅢの場合、雨・大雨のほかゲリラ豪雨や豪雨などの複数の雨の降り方も記述している。大雨を極端な降水量階級とする場合、降水現象の知識理解がおおづかみな傾向を示すことが判った。

### 中学校・高等学校の地理教科書における宗教の取り扱い

野口 恵里

グローバル化が急速に進み人々の交流が活発になる昨今、地理教育では異文化についての理解を深め、他国・他民族との共存共栄により諸国家・社会の平和的な発展を図るための異文化理解教育の重要性が高まっている。そのなかで宗教は人間の生き方や人々の社会に規範を示し様々な場面において人々の生活と密接に関わっているため、異文化理解において重要な要素である。これまでに地理教育、あるいは社会科教育における宗教の取り扱いについて様々な方法や視点から研究がなされている。しかしそれらは特定の宗教や教材を扱ったものが多く、宗教全般について包括的に教科書の取り扱いを分析したものは見られ

ない。

以上より本研究では、中学校から高等学校にかけての地理教科書における宗教に関する記述・図表・写真等を整理・分析し、地理教育における宗教の取り扱いについての特徴及び課題について考察することを目的とした。

分析の結果、地理学習における特徴として、第一に地理学習での宗教の扱いは各宗教の基本的な思想や教義あるいは各宗教の持つ歴史といった事項よりも、文化・生活との関わりについて重点を置いているという点、第二に分布図や写真といった多くの資料を活用した学習になっている点の二点が挙げられた。一方地理学習における課題として、第一に日本の宗教に関する扱いが非常に希薄である点、第二に中学校から地理Aあるいは地理Bへと学習段階が上がってもなお類似した写真が繰り返し掲載されており、過度な一般化を招きかねない点、第三に主に地理Bにおいて見られる異文化理解や多文化共生への言及が、抽象的な表現あるいは事象の羅列に留まってしまい、共感的理解や主体的な認識をすることが難しい点の三点が挙げられた。なお、本研究では上記の考察を踏まえた新たな学習の提案、授業実践などには至らなかったことが課題として残された。